

# 読誦漢音に於ける学習音の介入

——蒙求字音点の場合——

沼 本 克 明

## 目 次

- 一、序
- 二、蒙求
- 三、本論文で使用した蒙求諸本
- 四、蒙求読誦漢音の性格
- 五、学習の方法——音注の典拠——
- 六、反切音の介入
- 七、纏め

## 一、序

日本語の歴史の上に於いて、漢音はどの様に定着し、どの様に伝承されて来たのか。漢音の定着及び伝承には、「反切」がどの様な形で関与して来たのか。漢音とは何かを考えて行くと、その様な問題が浮かび上つて来る。

そういう問題の一端について先稿<sup>1)</sup>で取り上げてみた。そこでは、漢音と古辞書・音義の反切音注とがどの様な関係を有していたかを考えてみたのであるが、本稿では、更に具体的に、蒙求読誦音として伝承された平安く鎌倉時代の漢音に対して反切による学習音がどの様な形で介入したか、換言すれば、読誦伝承漢音は反切音によって、どういう面がど

の程度修正せられたものであるか、を考察し、以て漢音、というものの性格をより一層明らかにしようと試みた。

## 二、蒙 求

本稿で取り上げようとする蒙求は、日本漢音を考える上で重要な位置を占めるものと考えられる。

蒙求一卷は、唐の安平の李翰撰になり、その成立は確定はし難い様であるが、玄宗朝へ七一二〜七五六の元宝五年へ七四二へ頃と推定されている。<sup>(3)</sup>

本邦への伝来が何時頃であったかを正確に資料によつて示すことは出来ないが、その読誦に使用されている漢音の内、部徴象からすれば、奈良朝末〜平安朝初頭に、その頃の中国語の読み方と共に伝来した可能性が強いと思われる。平安朝初頭伝来の可能性については、書陵部蔵古注本蒙求の法眼謙宜の識語に「此蒙求上卷一冊者弘仁之頃 渡候書欵」と有つて、やはり江戸時代の学者も説いている。史実として確実な記事は、「三代実録」の元慶二年（八七八）に貞保親王が橘広相の侍読によつて学習したとするものである。

扱、この蒙求は、四字一句で中国の故事を列挙して行つたもので、全五九六句より成つてゐる。総字数二三八四字、異り字数は一三一六字となる。現存する蒙求の標題本（別に標題四字一句の各々の内容を注釈した古注本等有る）は、全て漢音で直読してゐるから、伝来以後、まず本文を音読する事から学習するという伝統が有つたと考えられる。

## 三、本論文で使用した蒙求諸本

まず次に、本稿で使用した蒙求字音点諸本の要点を記しておくこととする。

### ① 長承本蒙求一卷<sup>(5)</sup>

築島裕博士によれば、本書には三種の点がある。以下それを加點順に①②③とする。

①天曆頃朱点―八十二行目まで振仮名が所々に加えられ、全巻に声点加てされている。韻書などによる音注は一例も加えられていないと思われる。

②長承三年点―奥書「長承三年十二月廿七日(花押)ノ僧琳兌之本也」に対応するもので、天曆頃朱点と異なる墨声点が所々に加えられ、墨振仮名が全巻に加えられている。この点は、恐らく別本の声点と仮名を移点したものであろう。尚、反切注が一箇所加えられている。

③院政末―鎌倉初期点―②とほぼ同時期の墨振仮名が全巻の所々に加えられている。この点も恐らく別本の移点であろう。反切注は一例も加えられていない。

④ 聖語蔵本蒙求一卷<sup>(6)</sup>

鎌倉初期の墨筆による振仮名のみ。六十六行目まで加てされ、以下加ては無い。別本(恐らく院政期加て本であつたと考えられる)の移点作業が途中で中断されたものと思われる。反切注は一例も加えられていない。

⑤ 建保本蒙求一卷―奥書「建永元年(1171)年(1172)者ノ聖主嗣寶曆之第八季微臣侍御讀之第三季也今奉授此ノ書改新寫此本以先親傳我之訓今日及授 君之説抑ノ又藤黃門者累代師於 天子自親ノ於我家借其證本重所見合也爲我後傳此本之者努々ノ勿許勿許(ツツ)他見而已ノ翰林主人菅在判ノ建保六季十月以嚴親御本書寫畢ノ同寫點了ノ以累代之證本書寫點交早道順」。右の奥書によれば、建永元年(1171)に菅原為長(1156-1124)が侍読の爲に家説によつて加てした新写本を用意した。(その加ての際、親交の有つた藤黃門(日野資実カ)からその證本を借用して見合した)。以上の本を祖本として、建保六年に書写移点が行われ、更に後に道順(未詳)によつて書写移点されたものが本書であると思われる。道順書写移点がつであるかは不明であるが、本文の片仮名字体等を判断材料にすれば、鎌倉末期頃と見るのが妥当であらうか。墨振仮名が全巻に、墨声点(●と○)が一〇九行目まで加てされ、韻書からの音注が多数書き込まれている。

⑥ 康永本蒙求一卷―奥書「康永二年五月九日書寫之訖ノ貞和元年十二月廿七日以秘本一校早ノ同廿八日鑽仰了ノ

貞和二年太族廿一日授駒一鷹既／訖／直範」。(一三四五) 康永四年書写移点、(一三四五) 貞和元年校合されたもの。全巻に墨振仮名と墨声点がある。韻書による反切注が巻首部に二例有る。その他、鑽仰・授与の際に加えられたと思われる書き込みが種々有る。

#### 四、蒙求読誦音の性格

扱、以上①・②・③・④諸本の振仮名及び声点を抜き出して、これを切韻―所謂中古音―の体系に投影する作業を行った所謂分韻表を作成した訳であるが、その結果、これ等蒙求の字音には中古音の体系とずれる部分が存在する。このずれる部分は、体系的にずれるものと、個別的にずれるものが存在する。以下に簡単にその点を説明しておく。

##### ①体系的にずれる部分

イ、蒙求の字音が軽唇音化に伴う拗介音の脱落を反映した為のずれ。若干例を示す。

○東韻―風(フ)、非(フ)、豊(フ)、馮(フ)、奉(フ)、目(フ)、明(フ)等。非軽唇音化字は忠(フ)、躬(フ)、見(フ)、終(フ)、照(フ)、雄(フ)、手(フ)の如く拗介音は脱落しない。

○鍾韻―封(フ)、非(フ)、鋒(フ)、敷(フ)、奉(フ)等。非軽唇音化字は恭(フ)、見(フ)、共(フ)、群(フ)、邕(フ)、影(フ)、容(フ)、喻(フ)の如く拗介音は脱落しない。

ロ、蒙求の字音が侯韻明母字の模韻化を反映した為のずれ。

母(ホ)。明母字以外は部(ホ)、並(ホ)、斗(ホ)、端(ホ)、頭(ホ)、定(ホ)、鉤(ホ)、見(ホ)の如く本の侯韻の形を保つ。

ハ、蒙求の字音が幽韻の尤韻化を反映した為のずれ。

紉(ウ)、見(ウ)、幽(ウ)、影(ウ)。日本漢字音の中でも切韻時代の音を反映する呉音では、中古音の体系に従って、幽韻―繆(ウ)、繆(ウ)、幼(ウ)、尤韻―惆(ウ)、昼(ウ)の如く明瞭に区別されている。

読誦漢音に於ける学習音の介入

二、蒙求の字音が濁声母の清音化を反映した為のずれ。

銅(東韻定母)、軸(屋・澄)、重(鍾・澄)、降(絳匣)、隨(支・邪)、達(脂・群)等。

ホ、蒙求の字音が鼻音声母の非鼻音化を反映した為のずれ。

木(屋・明)、目(屋・明)、戎(東・日)、邈(賞・明)、兒(支・日)、眉(脂・明)、耳(止・日)、女(語・娘)、怒(姥・泥)、無(虞・微)等。念の為に付記すれば、以下がこの事象の例外の全てである。蒙(東・明)、濛(同上)、農(冬・泥)、邁(夫・明)、門(魂・明)、酒(獮・明)、面(線・明)、曼(元・微)、滿(緩・明)、囊(唐・泥)、孟(敬・明)、明(庚・明)鳴(同上)、命(敬・明)、萌(耕・明)、寧(青・泥)、甯(徑・泥)、南(覃・泥)。

以上、体系的にずれる部分の主な点について示したのであるが、この様なずれの存する理由は、蒙求の字音が、中古音を母胎としたものではなく、後の唐代の長安音―これを秦音と呼ぶ―を母胎にしたものであったことによる。我々は古来、蒙求読誦音の様な系統の字音を漢音と呼称して来た。要するに、漢音は中古音ではなく秦音を母胎にした漢字音であるのである。

## ② 個別的にずれる部分

中古音―切韻音―を基準に見て、それとずれるものを各資料・各点種別に抜き出すと次の如きものが有る。

- ① ①::駸(覺・幫)、曬(眞・禪)、効(怪・溪)、桂(霽・見)、號(豪・匣)、裝(陽・莊)、鈎(候・見)、凜(感・来)  
 ② ②③::麴(送・影)、棒(腫・敷)、續(獨・邪)、雍(鍾・影)、龐(江・並)、擢(覺・澄)、捉(覺・莊)、項(講・匣)、郗(脂・徹)、墜(至・澄)、駮(尾・敷)、烏(模・影)、甫(夬・非)、邾(虞・知)、于(虞・于)、効(怪・溪)、齊(齊・從)、桂(霽・見)、忖(混・定)、温(魂・影)、損(混・心)、限(產・匣)、煖(元・曉)、劬(願・溪)、襪(月・微)、侃(翰・溪)、粲(翰・清)、輸(翰)(翰・匣)、憐(先・来)、截(屑・從)、頡(屑・匣)、還(刪・匣)、壠(換

見、醪ラウ（豪・来）、自カク（皓・從）、炙キウ（禡・照）、康ヘイ（唐・溪）、鶴ハク（鐸・匣）、仰カウ（養・疑）、鵠セキ（藥・清）、圻セキ（陌・澄）、郢エキ（靜・喻）、暨ケキ（昔・幫）、號カク（陌・見）、傾キヤウ（清・溪）、隔キヤク（麥・見）、憤セキ（麥・初）、擲チヤク（昔・澄）、溺テツ（錫・泥）、幘コク（麥・見）、斗トウ（厚・端）、嗽シウ（候・心）、仇カウ（尤・群）、籊リウ（宥・澄）、榘シム（侵・知）、壞リム（感・来）、鄧リウ（澄・定）、秤ヘイ（秤・穿）、鷹キヨウ（蒸・影）、應キヨウ（證・影）、肱グム（登・見）

○：雲梯ウンティ（齊・透）、齊サイ（齊・從）、陳チン（真・澄）重ズウ（混・定）、江泉カウセン（仙・從）、瓊ズン（換・見）、埒ラシ（薛・来）、孫綽ソンシヤウ（藥・穿）、鷹キヨウ（蒸・影）

○：瓊ジヨウ（送・影）、董ズン（董・端）、衆リウ（東・照）、嵩ス（東・心）、奉ムム（腫・奉）、勗シヨウ（燭・曉）、龍リウ（東・来）、比ヒツ（旨・幫）、慈クエン（之・從）、市ハク（止・禪）、李キ（止・来）、補フ（姥・幫）、庾カウ（夔・喻）、齊サイ（齊・從）、忖シム（魂・定）、遵ズン（諄・諄）、罕フアン（曉・勸）（願・溪）、煖エン（元・曉）、憐リン（先・来）、截セキ（屑・從）、帽ホ（号・明）、顛ケイ（皓・匣）、狼リヤウ（唐・来）、象シヨウ（養・邪）、影ヤウ（梗・影）、隔キヤク（麥・見）、憤シヤク（麥・初）、整シ（靜・照）、擲チヤク（昔・澄）、錫シヤク（錫・心）、斗トウ（厚・端）、給キョク（緝・見）、汜シ（凡・奉）、識シキ（職・審）

○：嵩シウ（東・心）、郗チヤキ（脂・徹）、齊サイ（齊・從）、勸クワン（願・溪）、煖ズン（元・曉）、床シヤウ（陽・牀）、斲セキ（葉・莊）、幘コク（麥・見）、瀨シ（嗽）（候・心）、榘シ（寢・知）、匿トク（職・孃）、鷹キヨウ（蒸・影）

（尚、右例の抽出においては、音韻変化に関わつて出現したものやサ行音の直音表記などは取り挙げていない。）

扱、右に指摘した個別的なずれの例の中には、体系として異なる呉音の混入や音符による類推読み・字体の誤認・異本からの移点に際して漢字体はそのままで仮名のみ生かしたためのずれ、等々種々の性格のものが見られる。なぜこれ等のずれが生じたかは、従つて、一々について別に検討する必要が有るが、ここで重要な点は、こういう例が出現することは、この種の文献における読誦が、一字一字について然るべき拠り所に従う検証を経て行われるというものではない。

く、伝承されたままの読誦音に従つたり、或いは経験的に慣用している個々の字音に従つて行われていたことを物語る点である。

この様に考えて来ると、結局、蒙求の読誦音は唐代長安音を母胎にしてそれが口授口誦によつて伝承されたものという基本的性格を持っていると考える事が出来る。これを読誦伝承漢音と呼称することにする。

### 五、学習の方法——音注の典拠——

所で、右に見た「伝承」という概念に対立するものとして「学習（乃至「研究」）」という概念が考えられるであろう。当面の問題について言えば、一字一字の漢字音を「韻書」等の反切によつて学習して行くことである。漢字音を知る方法として反切を利用することは上代から行われ、平安時代に入つてから見られる訓点資料の反切音注の書き込みは、その学習の跡を明瞭に残しているものである。

以上の様な考え方に立脚して、本稿で問題とした諸資料の反切（及び同音字）注の有無を見ると、①②に一例の書入れ、③に一八八例の書入れ、④に二例の書入れ、が見られ、この中で、多量の書入れが行われている③に関して言えば、少くとも、その書入れが有るといふ事実から見れば、伝承漢字音に学習漢字音が介入していることになる。

そこで、この反切による学習漢字音がどの様な介入の仕方をしたものであつたかを考えようとするのであるが、ここで先ず問題になるのが、書入れに利用された「反切」がどの様な性格を有するものであつたかという点である。

我が国で漢字音学習に使用されたのは、「玉篇」「一切経音義」「切韻（諸本有り）」が主要な三大典拠であるが、③建保本蒙求で利用されたのは「切韻」系の韻書の一本であつたと考えられる。

（建保本書入れ例）

（宋本広韻）

① 麩鳥貫反

51行目

——○瓮鳥貫切五麩同……

|     |     |    |                  |
|-----|-----|----|------------------|
| ② 嵩 | 息弓反 | 4  | —○嵩<br>息弓切九…     |
| ③ 僕 | 蒲木反 | 37 | —○暴<br>蒲木切十二曝…僕… |
| ④ 琮 | 藏宗反 | 64 | —○賓<br>藏宗切十一琮…   |
| ⑤ 龔 | 音恭  | 44 | —○恭<br>九容切…龔…    |
| ⑥ 龔 | 居龍反 | 72 |                  |
| ⑦ 縱 | 子用反 | 41 | —○縱<br>子用切又子容切二… |
| ⑧ 竦 | 息拱反 | 33 | —○悚<br>息拱切十竦…    |
| ⑨ 績 | 則歷反 | 35 | —○績<br>則歷切四…     |
| ⑩ 馮 | 音欲  | 24 | —○欲<br>余蜀切九浴馮…   |

(以下省略)

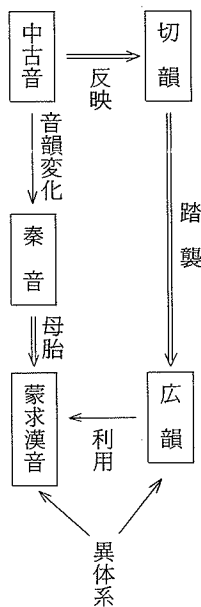
⑤龔は旧系切韻では冬韻に置かれている。従つて、この例によつて、利用された韻書が新切韻の系統に入るものであつたと考えられることになる。恐らく「唐韻」などと呼ばれた、現存「広韻」と非常に近い系統の一本であつたであらう。

所で、この「広韻」が反映する音韻体系は、既に明らかにされている様に、「切韻」の体系をほぼそのまま踏襲したものであつて、中古音—六朝末—隋の標準音—の音韻体系を反映したものである。従つて、その反切を蒙求の読誦に利用したことは、参考図に示した様に、秦音を母胎にした漢音に対して、体系の異なる反切を利用したことになる。

要するに、蒙求伝承漢音と反切音とは音韻体系が異なるのである。そこで、この様に体系上矛盾を有する反切が、実際上どういふ所まで伝承漢音に紹介していたのが問題になつて来る。



〔参考図〕



六、反切音の介入

①反切・同音字注と仮名音形との関係

建保本に加点されている反切・同音字注は以下の如くである（東韻以下分韻順に用例を示す）。

|            |           |           |            |           |           |             |             |
|------------|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|-------------|-------------|
| 書<br>又音所寄反 | 蔚<br>イ音尉  | 治<br>チ直吏反 | 冀<br>九利反   | 氏<br>シ承紙反 | 鴿<br>音欲   | 翼<br>イヨウ翼反  | 鸞<br>イヨウ鳥質反 |
| 18         | 109       | 8         | 4          | 26        | 24        | 44          | 51          |
| 褚<br>チ丑呂反  | 樗<br>チ丑居反 | 士<br>シ鋤里反 | 墜<br>ツイ直類反 | 雉<br>チ直几反 | 降<br>古巷反  | 翼<br>イヨウ居龍反 | 高<br>ス息弓反   |
| 87         | 88        | 6         | 70         | 9         | 22        | 72          | 4           |
| 巨<br>其巨反   | 墟<br>キ音巢  | 祀<br>シ音似  | 遺<br>キ以醉反  | 摯<br>音至   | 邈<br>莫角反  | 竦<br>シウ息拱反  | 琮<br>ソウ藏宗反  |
| 68         | 83        | 106       | 122        | 20        | 63        | 33          | 64          |
| 距<br>音巨    | 鋤<br>シ十魚反 | 筍<br>シ相吏反 | 遺<br>イ以醉反  | 視<br>シ承矢反 | 妓<br>キ渠綺反 | 縱<br>子用反    | 僕<br>ホ補木反   |
| 97         | 85        | 56        | 105        | 88        | 76        | 41          | 37          |

読誦漢音に於ける学習音の介入

|   |   |   |   |  |   |   |  |  |  |  |   |  |  |   |  |  |  |
|---|---|---|---|--|---|---|--|--|--|--|---|--|--|---|--|--|--|
| 篆 <small>アシ</small> 持 <small>シ</small> 兌 <small>反</small> | 截 <small>セキ</small> 昨 <small>シ</small> 結 <small>反</small> | 善 <small>セン</small> 常 <small>シ</small> 演 <small>反</small> | 單 <small>タン</small> 都 <small>シ</small> 寒 <small>反</small> | 阮 <small>ア</small> 虞 <small>シ</small> 遠 <small>反</small> | 甄 <small>ア</small> 居 <small>シ</small> 延 <small>反</small> 又 <small>又</small> | 澹 <small>タン</small> 音 <small>シ</small> 峻 <small>反</small> | 遵 <small>ア</small> 將 <small>シ</small> 倫 <small>反</small> | 忱 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 屯 <small>反</small> | 誅 <small>ア</small> 所 <small>シ</small> 臻 <small>反</small> | 蔡 <small>ア</small> 在 <small>シ</small> 蓋 <small>反</small> | 頽 <small>ア</small> 五 <small>シ</small> 罪 <small>反</small> 又 <small>又</small> | 悌 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 第 <small>反</small> | 玠 <small>ア</small> 古 <small>シ</small> 祥 <small>反</small> | 乳 <small>ア</small> 而 <small>シ</small> 主 <small>反</small>                    | 輔 <small>ア</small> 放 <small>シ</small> 雨 <small>反</small> | 忤 <small>ア</small> 五 <small>シ</small> 故 <small>反</small> | 簿 <small>ア</small> 表 <small>シ</small> 古 <small>反</small> |
| 63  | 69  | 40  | 41  | 86   | 88  | 54  | 43   | 26   | 12   | 42   | 96  | 15   | 21   | 3   | 93   | 53   | 4  |
| 喘 <small>ア</small> 昌 <small>シ</small> 兌 <small>反</small>  | 頡 <small>ア</small> 胡 <small>シ</small> 結 <small>反</small>  | 轍 <small>ア</small> 直 <small>シ</small> 列 <small>反</small>  | 罕 <small>ア</small> 呼 <small>シ</small> 早 <small>反</small>  | 琬 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 苑 <small>反</small> | 灑 <small>ア</small> 弥 <small>シ</small> 兌 <small>反</small>                    | 緇 <small>ア</small> 於 <small>シ</small> 粉 <small>反</small>  | 荀 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 春 <small>反</small> | 噤 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 異 <small>反</small> | 虱 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 瑟 <small>反</small> | 賈 <small>ア</small> 莫 <small>シ</small> 儼 <small>反</small> | 噲 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 快 <small>反</small>                    | 閑 <small>ア</small> 博 <small>シ</small> 計 <small>反</small> | 劾 <small>ア</small> 胡 <small>シ</small> 愛 <small>反</small> | 孺 <small>ア</small> 斯 <small>シ</small> 而 <small>反</small> 遇 <small>反</small> | 柱 <small>ア</small> 直 <small>シ</small> 主 <small>反</small> | 鳩 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 句 <small>反</small> | 杜 <small>ア</small> 徒 <small>シ</small> 古 <small>反</small> |
| 63  | 56  | 42  | 40  | 29   | 94  | 75  | 25   | 92   | 45   | 68   | 18  | 3  | 44   | 102   | 5  | 24   | 10   |
| 輟 <small>ア</small> 陟 <small>シ</small> 劣 <small>反</small>  | 冠 <small>ア</small> 古 <small>シ</small> 段 <small>反</small>  | 設 <small>ア</small> 識 <small>シ</small> 列 <small>反</small>  | 旃 <small>ア</small> 諸 <small>シ</small> 延 <small>反</small>  | 勸 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 券 <small>反</small> | 刮 <small>ア</small> 苦 <small>シ</small> 口 <small>反</small>                    | 掘 <small>ア</small> 循 <small>シ</small> 物 <small>反</small>  | 循 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 句 <small>反</small> | 滑 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 骨 <small>反</small> | 嬪 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 頻 <small>反</small> | 掛 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 卦 <small>反</small> | 帶 <small>ア</small> 當 <small>シ</small> 蓋 <small>反</small>                    | 詣 <small>ア</small> 五 <small>シ</small> 計 <small>反</small> | 倪 <small>ア</small> 五 <small>シ</small> 稽 <small>反</small> | 愷 <small>ア</small> 苦 <small>シ</small> 亥 <small>反</small>                    | 娶 <small>ア</small> 七 <small>シ</small> 句 <small>反</small> | 繻 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 儒 <small>反</small> | 祐 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 戸 <small>反</small> |
| 52  | 20  | 81  | 90  | 72   | 82  | 106   | 20   | 90   | 88   | 62   | 61  | 19   | 85   | 50  | 90   | 101  | 14   |
| 蕪 <small>ア</small> 而 <small>シ</small> 悅 <small>反</small>  | 患 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 管 <small>反</small>  | 駢 <small>ア</small> 部 <small>シ</small> 田 <small>反</small>  | 蹇 <small>ア</small> 居 <small>シ</small> 偃 <small>反</small>  | 媛 <small>ア</small> 于 <small>シ</small> 願 <small>反</small> | 樊 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 煩 <small>反</small>                    | 轄 <small>ア</small> 胡 <small>シ</small> 轄 <small>反</small>  | 僑 <small>ア</small> 子 <small>シ</small> 峻 <small>反</small> | 窟 <small>ア</small> 音 <small>シ</small> 骨 <small>反</small> | 鬻 <small>ア</small> 之 <small>シ</small> 忍 <small>反</small> | 舂 <small>ア</small> 杜 <small>シ</small> 根 <small>反</small> | 艾 <small>ア</small> 五 <small>シ</small> 蒿 <small>反</small>                    | 齡 <small>ア</small> 郎 <small>シ</small> 帝 <small>反</small> | 詆 <small>ア</small> 都 <small>シ</small> 禮 <small>反</small> | 楛 <small>ア</small> 苦 <small>シ</small> 駭 <small>反</small>                    | 數 <small>ア</small> 瘦 <small>シ</small> 句 <small>反</small> | 父 <small>ア</small> 扶 <small>シ</small> 雨 <small>反</small> | 戸 <small>ア</small> 後 <small>シ</small> 古 <small>反</small> |
| 41  | 6   | 95  | 71  | 64   | 18  | 43  | 53   | 96   | 93   | 36   | 55  | 63   | 16   | 1   | 90   | 78   | 3  |

|                         |  |                         |                         |   |                         |                         |                         |                          |                          |                          |  |                         |                        |                          |  |                         |                         |
|-------------------------|--|-------------------------|-------------------------|---|-------------------------|-------------------------|-------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--|-------------------------|------------------------|--------------------------|--|-------------------------|-------------------------|
| 慘 <small>サン</small> 七感反 | 歎 <small>キン</small> 許音反<br>歎 <small>キ</small> 許音反又 | 負 <small>フ</small> 音婦   | 部 <small>ホ</small> 浦口反  | 冷 <small>レイ</small> 音靈  | 癖 <small>ヘキ</small> 普壁反 | 羸 <small>エイ</small> 音盈  | 抗 <small>カウ</small> 客庚反 | 讓 <small>シヤウ</small> 人濼反 | 斃 <small>シヤウ</small> 昌西反 | 鑿 <small>サク</small> 在各反  | 霸 <small>ハ</small> 博質反                             | 輶 <small>ク</small> 古果反  | 他 <small>タ</small> 徒可反 | 剽 <small>ハツ</small> 足妙反  | 嶠 <small>ク</small> 冀廣反<br>嶠 <small>ク</small> 冀廣反 | 傲 <small>カウ</small> 五到反 | 稟 <small>カウ</small> 古老反 |
| 74                      | 36   | 15                      | 49                      | 23  | 80                      | 67                      | 68                      | 85                       | 103                      | 3                        | 8  | 60                      | 62                     | 108                      | 17   | 105                     | 101                     |
| 壞 <small>ク</small> 虛成反  | 歎 <small>キム</small> 許音反                            | 壽 <small>シウ</small> 殖西反 | 嗽 <small>ソウ</small> 所祐反 | 逕 <small>ケイ</small> 古定反   | 適 <small>タク</small> 丈厄反 | 請 <small>キウ</small> 音靜  | 慶 <small>ケイ</small> 丘敬反 | 却 <small>キヤク</small> 去約反 | 鞅 <small>ヤウ</small> 於兩反  | 霜 <small>サウ</small> 反    | 炙 <small>シキ</small> 之石反<br>炙 <small>シキ</small> 之夜反 | 穎 <small>ケイ</small> 苦果反 | 軻 <small>カ</small> 苦反  | 漂 <small>ヒョウ</small> 匹部反 | 劭 <small>シヤウ</small> 寔照反                         | 操 <small>サウ</small> 七到反 | 好 <small>カウ</small> 古到反 |
| 71                      | 53   | 38                      | 18                      | 37  | 82                      | 11                      | 89                      | 21                       | 103                      | 22                       | 60   | 39                      | 29                     | 81                       | 19   | 89                      | 85                      |
| 笈 <small>ク</small> 楚洽反  | 識 <small>シキ</small> 楚譜反                            | 友 <small>ユウ</small> 云久反 | 迨 <small>トウ</small> 以周反 | 績 <small>シヨク</small> 則歷反  | 鄭 <small>テイ</small> 直政反 | 靚 <small>キウ</small> 疾正反 | 郤 <small>キキ</small> 去戟反 | 綽 <small>シヤク</small> 昌約反 | 放 <small>ハフ</small> 府妄反  | 杖 <small>チヤウ</small> 直兩反 | 抗 <small>カウ</small> 苦浪反                            | 馬 <small>ハ</small> 反    | 訛 <small>シ</small> 五禾反 | 醮 <small>キウ</small> 子肖反  | 標 <small>ヒョウ</small> 音                           | 鮑 <small>ハウ</small> 薄巧反 | 好 <small>カウ</small> 呼老反 |
| 99                      | 6  | 15                      | 41                      | 35  | 11                      | 14                      | 12                      | 20                       | 53                       | 51                       | 4  | 89                      | 6                      | 57                       | 5  | 14                      | 40                      |
| 瞻 <small>シ</small> 職廉反  | 譚 <small>タン</small> 音覃                             | 籀 <small>シウ</small> 直祐反 | 瘤 <small>リウ</small> 音劉  | 輻 <small>フク</small> 又古獲反<br>輻 <small>フク</small> 古獲反<br>輻 <small>フク</small> 古獲反<br>輻 <small>フク</small> 古獲反 | 揆 <small>キキ</small> 之石反 | 躋 <small>キキ</small> 必益反 | 屐 <small>キキ</small> 奇逆反 | 曠 <small>クワウ</small> 苦誘反 | 量 <small>リヤウ</small> 音亮  | 蔣 <small>シヤウ</small> 即西反 | 盎 <small>アウ</small> 鳥浪反                            | 鮓 <small>ソ</small> 則下反  | 墮 <small>タ</small> 徒果反 | 要 <small>ユウ</small> 於咲反  | 瓢 <small>ヒョウ</small> 符霄反                         | 紹 <small>シウ</small> 市沼反 | 顯 <small>ケン</small> 音皓  |
| 28                      | 6  | 63                      | 66                      | 122   | 149                     | 94                      | 85                      | 91                       | 21                       | 37                       | 21   | 51                      | 107                    | 1                        | 109  | 70                      | 107                     |

|                     |                     |                     |                     |                     |                     |                     |                     |                     |                     |
|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 蠅 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ラフ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> |
| 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> |
| 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> |
| 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> |
| 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> |
| 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> |
| 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> |
| 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> |
| 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> |
| 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> | 蠟 <small>ケウ</small> |

以上が中国側の韻書から引用された音注の全てであるが、では、仮名音注との関係は一体どうなっているのでしょうか。今、反切の上字下字を漢音で読んで被注字の字音形を導き出すものと考えて、両者の関係を見ると、矛盾するものの比率は少ない。それは両者が共に漢字音であることから当然ではあるが、重要なのは、矛盾するものが有るという事実である。分り易い例を若干示してみる。

遺キ以醉反 冠クワン古段反 墮ト徒果反 曠クワン苦務反

右の様な例は、反切から導き出されるはずの字音形と振り仮名の字音形が異なるものであり、その反切音形は採用されず、所謂伝承漢音のままである。つまり、この資料では、反切の書き込みは行われているが、その反切を適用して当該字の字音形を導き出して読んで行くという具体的な作業は行われてはいないのである。従って、先に指摘した、蒙求漢音と反切音に体系上の差違の存する部分において、反切音によって蒙求漢音を改変して行く様なことも、当然のことながら行われてはいない。例えば、軽唇音化に係わる音韻変化の部分について言えば、蒙求漢音では

風フウ・豊フウ・馮フウ・鳳フウ・伏フウ・鳩フウ (以上東韻の例)  
不フ・負フ・富フ (以上尤韻の例)

などの様に拗介音の脱落した秦音に沿った形であつて、中古音の「風フウ」或いは「不フ」の様な反切から導かれるはずの「ヒウ」の形は一切出現してはいない。

只一例「秤ヘイ子孕反又昌陵反 象シヤウ104」の例が見られ、これは、「秤」字に加えられた反切「子孕反又昌陵反(シヨウ)」を「象」字の反切と誤解してその反切から導いた音を加えた為に結果的に開合の誤った音形が出現したものと見られる。従って

読誦漢音に於ける学習音の介入

この例は、誤解に基づくものではあるが、読誦伝承者に反切音が介入した例ということになるが、一方から見れば、この例は、「セキ入ノ之石反反60」の複数字異義字の場合の文脈上の解釈作業に係わって出現した様な例と同じく、全体から見れば特殊例と考えることが出来る。

従って、結論的に言えば、この種の読誦音の場合にはその伝承漢音の音形を反切によって改変して中古音の体系に戻すという様な作業は行われず、反切音の介入は殆ど無かつたと言うことが出来る。

## ②反切と声調との関係

次に、反切と蒙求漢音との声調について考えてみる。

反切が示す中古音と漢音の母胎となった秦音との体系のずれる部分として重要なものに上声全濁字の去声化に係わる部分がある。中古音の上声全濁字は唐代に入って漸次去声化を始め、唐代末期の長安標準音では去声化がほぼ完了したものと考えられる。秦音はその去声化の過程にあつて、その秦音を母胎にした日本漢音にもこの去声化が反映している。そして蒙求読誦でも当然の事ながら、中古音上声全濁に去声の声点の加えられたものが数多く出現している。中古音の声調体系と蒙求読誦音の声調体系は、ずれているのであつて、反切によつて声点を加點すれば、ここでも改変が行われることになるのであるが、果して実態はどうであらうか。

まず、建保本の中古音上声全濁字の中で反切の加えられている例と、反切の加えられていない例に分けて実例を示してみる。

### ◎反切の加えられた字

(長承本)

1 妓<sup>・</sup> 76

2 氏 26

(建保本)

妓<sup>・</sup> 集綺反

氏<sup>・</sup> 承紙反

(康永本)

妓<sup>・</sup> 氏

氏<sup>・</sup> 氏

14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3  
 ・父 祐 戸 杜 杜 杜 杜 杜 簿 拒 距 巨 祀 士 士 士 視 雉 氏  
 78 14 3 56 48 38 37 10 4 100 97 68 106 113 13 6 88 9 109

読誦漢音に於ける學習音の介入

・父 祐 戸 杜 杜 杜 杜 杜 簿 拒 距 巨 祀 士 士 士 視 雉 氏  

 扶雨反 祐音戸 後呂反 徒古反 表古反 音巨 音巨 其巨反 音似 雷点ナシ 鋤里反 承矢反 直几反

・父 祐 戸 杜 杜 杜 杜 杜 簿 拒 距 巨 祀 士 士 士 視 雉 氏  

 (上声点に合点アリ)

26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15  
部靖杖杖墮墮紹鮑鮑鮑顯篆善善梯柱柱輔  
49 11 104 51 115 107 70 148 48 14 107 63 95 40 15 5 101 93

部靖杖杖墮墮紹鮑鮑鮑顯篆善善梯柱柱輔  
蒲口反 音静 直兩反 (声点ナシ) 徒果反 市沼反 (声点ナシ) 薄巧反 音暗 持亮反 常延反 音第 直主反 直主反 放兩反

部靖杖杖墮墮紹鮑鮑鮑顯篆善善梯柱柱輔  
(上声点に合点アリ)

|     |      |     |     |
|-----|------|-----|-----|
| 去声点 | 上去两点 | 上声点 | 長承本 |
| 25  | 3    | 22  | 建保本 |
| 8   | 14   | 19  | 康永本 |
| 34  | 2    | 14  |     |

(表 1)

以上を数量的に処理すると次の様になる。

することとした。

中古音上声全濁字で、建保本で反切注の加えられた例は以上の31字である。同じ字が何回か出現する場合、右に見られる様に、大旨初出字に反切が加えられているので、初出字の反切注は後出字にまで影響を与えているものと見て処理

31 犯 30 檻・儉 29 儉・壽 28 壽 27 負・負・負・負  
 57 103 108 106 106 38 38 131 99 71 15  
 犯<sub>音范</sub> 檻<sub>胡艶反</sub> 儉 儉<sub>巨險</sub> 壽 壽<sub>殖酉反</sub> 壽 負<sub>(声点ナシ)</sub> 負 負 負<sub>音婦</sub>  
 犯 檻 儉 儉 壽 壽 壽 負 負 負 負



参考までに右の中で反切注が加えられている字のみに限定すると次の様になる。

| 去声点 | 上去両点 | 上声点 |
|-----|------|-----|
| 16  | 3    | 13  |
| 6   | 11   | 15  |
| 21  | 2    | 10  |

(表 2)

◎反切の加えられていない字

(長承本)

(建保本)

(康永本)

36 市市 35 被被 34 被 33 項 奉 奉 32 奉  
 4 106 65 41 119 75 26 45 116 100 79

市市 市市 被被 被被 項 奉 奉 奉  
(振仮名ハク) (去声に合点) (声点ナシ) (去声に合点) (振仮名ケン)

市市 市市 被被 被被 項 奉 奉 奉

49 趙・ 48 浩・ 47 皂・ 46 造・造・ 45 道・道・ 44 断・断・ 43 辨・辨・ 42 飯・飯・ 41 踐・ 40 限・ 39 棧・ 38 憤・ 37 聚・  
 33 149 142 75 56 70 47 103 34 118 20 144 130 107 144 143 117 49

趙・ 浩・ 皂・ 造・造・ 道・道 断・断・ 辨・ 辨・ 飯・ 飯・ 踐・ 限・ 棧・ 憤・ 聚・  
(声点ナシ) (声点ナシ) (声点ナシ) (声点ナシ) (声点ナシ) (声点ナシ) (声点ナシ)

趙・ 浩 皂・ 造・造・ 道・道 断・断・ 辨・ 辨・ 飯・ 飯・ 踐・ 限・ 棧・ 憤・ 聚・  
(浩)

読誦漢音に於ける学習音の介入





ち、建保本ではへ表1への反切注が加えられている字の場合には上声点に加点されているものが圧倒的に多く、へ表3への反切注が加えられていない字の場合には去声点に加点されているものが多く、然もその比率は康永本の場合とほぼ等しいものとなっている。この事は、結局、建保本の場合には、切韻系韻書の反切が示す声調によつて声点を改めて加点したものが有ることを示している。このことが端的にうかがわれるのは、用例番号3雑、6祀、8距、9拒などの例であつて、これ等の字の伝承漢音の声調は去声化したもので、長承本や康永本ではそのままであつたのに対し、建保本では反切によつて、古い中古音の上声に人為的に改めたものである。

斯くして、建保本では、反切音による声調の改変という形で、学習音の介入が存在していたことが知られるのである。所で、長承本・建保本・康永本の三資料の上声全濁字全てを改めて総計表に纏めてみると次のようになる。

|      |    |     |     |     |
|------|----|-----|-----|-----|
|      |    | 長承本 | 建保本 | 康永本 |
| 上声点  | 47 |     |     | 32  |
| 上去両点 | 10 |     |     | 3   |
| 去声点  | 48 | 34  |     | 75  |

(表1+表3)

右の中、長承本の声点は天曆頃加点の朱点が中心になるものであるが、上去両点字の一方は実は長承三年加点の後筆の声点である。先の実例番号11・12・26・43・45・46・52・54・55・60の一方が長承三年点である。内訳は、天曆点上声を長承点去声に直したものの九字、天曆点去声を長承点上声に直したものの一字、である。従つて、実際の天曆点の上声全濁字は、上声56字、去声49字ということになり、上声を保つ度合がやや高い声調体系を持つものであつたと推定出来ることになる。これに対して、最初に言及したように、長承点は朱点と異なる場合に限つて加点したもののようであるから、長承点加点者(乃至移点ならその移点祖本)の上声全濁字は、上声48字・去声57字となり、去声化の度合が高い声調体系を持つものであつたことになる。日本漢音の中に、上声全濁字の去声化の比率の異なりに応じて、種々層が有

つたらしいことについてはかつて言及した所である。この考えに従えば、天曆点と長承二年点とは声調体系が異なるものであったことになる。

同様に建保本の上去両点字を、読誦漢音のものと声調が去声で、それを反切に従って上声に修正した例と考えて、もとの姿に直してみると、上声29字、去声53字となつて、これもやはり去声化した比率の高い声調体系を有するものであったことになる。

康永本には反切注が二例しか加點されていないので、反切による学習が実質的にどの様な影響を与えたものかは判然としないが、上去両点字についてみると、三字とも上声点 $\parallel$ 即ち韻書の反切の声調 $\parallel$ に合點が加えられているので、建保本と実質的には同性格のものと考えられ、同様に処理してみると、もとの姿は、上声32字、去声78字となり、やはり去声化の比率が高い声調体系を有するものであったと考えられる。

以上の処理は全て延べ出現字数による処理であるが、單純に異り字数によつて処理してみると結局左のようになり、

|    |    |     |
|----|----|-----|
|    | 上声 | 天曆点 |
| 去声 | 34 | 長承点 |
|    | 39 | 建保本 |
|    | 48 | 康永本 |
|    | 26 |     |
|    | 24 |     |
|    | 25 |     |
|    | 45 |     |

長承三年点・建保本・康永本の三本が天曆点とは別の去声化の比率の高い声調体系を有する同系統の漢音であつたのではないかと思われる。

扱、建保本の声調体系はもともと上声全濁字が去声化した比率の高いものであつたとして、そこに出現した上去両点字は、もと去声であつたものを反切によつて上声に修正したものと解釈出来るので、上去両点19字を上声に修正した結

果は、単純に計算すると、上声対去声が

24対48 ↓ 43対29

の如く、上声を保つ比率の非常に高いものへと変化したことになる。従つて、声調への反切の介入は、単なる個別的な問題に留まらず、いわば、秦音の声調体系を中古音の声調体系へ修正するという結果を導き出したことになると言えるであろう。

声調の方面について、蒙求読誦漢音と反切音との間で最も顕著な差違を見せる上声全濁字に限つて以上の検討を行ったのであるが、それ以外の字についても、反切によつて声調を修正した場合が有り、それ等は結果的には同様に中古音の声調へ人為的に修正したものとなることは言うまでもない。

建保本では一八八例ほどの反切（同音字）注が加えられているが、平声字・入声字に加えられたものは比率的に低く、上声字・去声字に加えられたものが多い。上声字の中でも全濁字に加えられたものが異常に多い。この様な傾向を示すのも、伝承読誦漢音における上声と去声の間のゆれや就中上声全濁字の去声化という現象が現実の問題として存在し、それを解決する方法として韻書の反切が拠り所とされたということであろう。

## 七、纏め

蒙求読誦漢音の様な読誦伝承音においては、反切（韻書）による学習によつて伝承されている字音形を改変修正することはないが、声調については改変修正が行われている場合が有つた。結局日本人にとつて声調の習得が難しく安定的な伝承が困難であつた<sup>(15)</sup>という事であろう。

なお、一般に読誦資料には、韻書から引用した反切音注を書き込んだ実例は甚だ少ない。この点、訓点資料の場合とは異なる。恐らくこれは、読誦資料は、その漢字・漢文そのものの解説・解釈が直接の目的ではなかつた、つまり研究<sup>(16)</sup>

の対象としての取り扱いを受けていなかった所に要因が有ると考えられる。

### 〈付 論〉

そういう一般的な傾向から見れば、建保本蒙求は特異な資料であると言えそうであるが、同様な例が全く無い訳ではないので、最後にそれを指摘しておくこととする。

蒙求と同じく漢音読の読誦經典が多数残っている理趣經の場合も、管見の及んだ範囲では一例も反切注を加えたものは存在しない。恐らく反切による学習とは無縁のままに傳承されたものであろう。そういうものの中に在って、所謂孝源版理趣經として知られた系統の本は事情を異にしている。その本奥書に次の様に有る。「本云／朱點者喜多院御室守覺法親王／召管宰相爲長卿勸字書任本聲／被差之墨點者登時聲明師之讀也<sup>云々</sup>」。この本と祖本を共通にすると思われる一本が高山寺に現藏されている(第36函5号)。奥書は次の如くである。「御室御本云／爲長勸字書任本聲差之讀習／說相違字等以墨指聲<sup>云々</sup>／延文五年三月十二日寫點早／永和三年十月廿九日以東寺觀智院／賢寶僧都本寫點七返交合早／惣持沙門賢遍／口傳云朱點、北院御室召爲長卿被差／聲墨、其比、聲明師ノ讀習<sup>ハセル聲ヲ</sup>／被差<sup>云々</sup>／己上寫也(以上本奥)」「正保四年三月六日以心蓮院經藏／本寫取之早 金剛佛子永弁」(以下略)。この奥書に対応して、高山寺本の本文には全卷に朱声点が、また所々に墨声点が加えられている。また全卷に振仮名で字音形が示されている。この朱声点は韻書(広韻)の四声に一致し、墨点は一致しない。また振仮名の字音形は韻書の反切から導き出されるものとは一致しない部分がある。奏音を母胎とする傳承漢音形である。これを要するに、本書の場合、奥書に有る様に、朱四声点のみを韻書の四声に従って人為的に修正したものである。

墨声点―其比の聲明師の読み方―は傳承漢音であつたと考えられ、上声全濁字についてみると、(●朱点、○墨点)

- ・道。
- ・墮。
- ・受。
- ・在。
- ・善。
- ・罪。



の様に、伝承漢音では去声化していたことが知られる例が多いのである。

斯くして、この理趣経の場合、声調のみが韻書に従って全て中古音の声調体系に修正されてしまったのであったことになる。彼が徹底的ではなくむしろ恣意的な様相を呈すに對し、此が徹底的であるという点に差違は認めねばならないが、伝承漢音の声調に限って韻書で修正するという行き方は両者に共通している。そうして、改めて注目すべきことは、彼の建保本蒙求も加点祖本は菅原為長のものであり、此の理趣経も亦菅原為長であるという事実である。他に類例が容易に見出せないという点からは、或いは日本漢音史という点からは為長個人に帰すべき特異な資料とも考えてみなくてはならないが、然し一方で古辞書—例えば凶書寮本類聚名義抄—では韻書の四声通りに声点を差している訳であつて、そういう例との連続という観点に立てば、日本漢音というその全体が「字音形は伝承のままに、声調は韻書による支えで」維持されたものであつたとも考えなくてはならないであらう。

韻書による声調の修正という点で言えば、漢音に對立する呉音についても、やはり類例が存する。時代が降る読誦音資料であるが、「日相本妙法蓮華經」がそれである。本満寺刊複製本についてみると、開經無量義經、結經觀普賢經と共に、その四声は全て韻書（広韻）に一致している。但し、付刻されている仮名の字音形及び声点で示されている清濁の區別は全て伝承吳音形である。従つて、本資料の場合においても、四声のみが韻書の四声へと修正されているのである。法華經におけるこの様な行き方がいつごろから、なぜ行われるようになったのかは今後詳しく検討してみる必要が有るが、先に言及した様に、日本人にとつて、四声の伝承が非常に困難であつたという所に要因は絞られて行くのではないかと考えられる。

## 注

- (1) 「古辞書・音義の音注と漢音」（築島裕博士還暦記念国語学論集一所収）。
- (2) 拙著「日本漢字音の歴史」一三八頁参照。

- (3) 早川光三郎「蒙求解説」(「新釈漢文大系58蒙求上」所収)等参照。
- (4) 築島裕「長承本蒙求字音点(一)」(「訓点語と訓点資料」第十輯)等参照。
- (5) 築島裕「長承本蒙求字音点(二)」(同補正)(二)「訓点語と訓点資料」第十・十一輯)による。
- (6) 南都秘笈複製本による。
- (7) この建保本及び次の康永本は共に東寺旧蔵本で現在天理図書館に所蔵されている。両方共に築島裕博士蔵写真真版に依拠した。
- (8) このずれる部分については、詳しくは拙著「日本漢字音の歴史」二一九頁〜二三二頁参照。
- (9) 就中、頻用される漢字の音符を手掛りにした読み方、墜タビ、甫フ、忖ツン、煖エン、憐レン、頤イ、籀シュウなどはその典型である。
- (10) なお本書の天曆頃朱点の字音注には「孫尊反」「郅悉反」などの漢字によるものが多数加えられているが、これ等は全て仮名に準じるものであつて、韻書によつた同音字注ではないと考えられる。
- (11) 以下本稿で示す行数は、長承本及び聖語蔵本の如く一行四句で清書されている本での行数である。
- (12) ここに言う「旧系切韻」とは陸氏切韻系のことで、「切韻」と呼称されるものの中には秦音に基づくものも作られていた。詳しくは注1引用の拙稿参照。
- (13) この点の詳しいことについては、拙著「平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究」第二部第五章参照。
- (14) 注13引用拙著参照。
- (15) 従つて、読誦音資料の場合には、時代が降る程韻書に依拠する方法が必要とされたと推定される。
- (16) 漢音が使用された漢籍訓点資料を例に取れば、平安中期の「古文尚書」や「毛詩」では陸徳明の「經典釈文」の反切が書き込まれ、「漢書楊雄伝」ではその諸家音義からの反切が書き込まれている(注13引用拙著参照)。そして、「漢書楊雄伝」についてみると、この場合にはその反切から導き出された仮名書音形が見られ、逆に声調については反切(中古音)に従わないで当時の伝承された声調体系に従つて加點されていると思われる(何となれば、上声全濁字に去声点の差されているものが多いので)。そうしてみると、所謂蒙求の様な直読資料と漢籍訓点資料とは韻書等の反切による学習の意味が異なつていたと言えそうであるが、詳しいことは尚よく検討する必要がある。
- (17) 高山寺蔵の一本「理趣経鎌倉期点」については、拙稿「高山寺蔵理趣経鎌倉期点解説並びに影印」(「鎌倉時代語研究」第六

輯)で紹介し、伝承漢音を反映するものであることを説いた。

(18) 兜木正亨氏は、韻書の四声を法華經に取り入れることは元禄五年の慈海本に始まるとされている〔法華音義類聚乾〕の解説)。